『思惟略要法』と『五門禅経要用法』

山　部　能　宜

「禅観経典」と総称される一連の文献が，往時の仏教者達の実践を知るための貴重な資料であることは，改めて言うまでもない．しかしながら，これら「禅観経典」をめぐっては多くの文献学的問題点が残されており，そのような問題点を解決することなしには，それらの文献に基づいて禅観の実践形態を解明することも難しいであろう．そこで本稿では，「禅観経典」から『思惟略要法』（以下『略要法』）と『五門禅経要用法』（以下『五門禅経』）を取り上げて，文献学的に検討することとしたい．『略要法』と『五門禅経』の間には，極めて多くの並行部分があり，この広範な共通部分に基づき，藤堂恭俊・月輪賢隆両博士は，前者は後者から抄出されたものであると主張されている[1]．しかしながら，この点に関しては再検討の余地があるように思われる．本稿では，これら両文献の再検討を通じて，禅観経典の形成をめぐる複雑な状況の一端を明らかにしてみたい．

『略要法』の構成は以下の通りである．（『五門禅経』の対応箇所を右欄に示し，かつ両文献の対応する部分を太線で囲む）．

『略要法』		『五門禅経』
1. 導入部（心有三病／五門禅：四無量・観不浄・観因縁・念仏三昧・阿那般那）	297c20-298a14	332a12-21；332b21-c6
2. 四無量観法	298a15-b17	332a22-b21
3. 不浄観法	298b18-c18	332c7-25
4. 白骨観法	298c19-299a2	326c25-327a7
5. 観仏三昧法	299a3-28	327a8-b1
6. 生身観法	299a29-b8	327b1-9
7. 法身観法	299b9-c2	327b9-c1
8. 十方諸仏観法	299c3-18	327c2-16
9. 観無量寿仏法	299c19-300a10	
10. 諸法実相観法	300a11-b23	

11. 法華三昧観法	300b24-c14	

ここで，2-9 の各項目は，大きく見れば四無量心・不浄観・念仏観の三項目にまとめられるが，これは『略要法』自体が冒頭に掲げる五種の行のうちの三項目である．また，「10. 諸法実相観法」は，その冒頭に「諸法従因縁生」云々の言葉が出ることより判断して，「観因縁」に相当するのであろう．「阿那般那」の説明は見出せないが，それ以外の四項目については，比較的合理的な構成を持っているといえる．また，5-8 の観仏（念仏）の修行は，観像から生身観・法身観・十方諸仏観へと進む構造を持っているが，これは『坐禅三昧経』(T15：276a6-277a26) 等にも見られる構造であり，不自然な点はない．それに続く「9. 観無量寿仏法」も，観仏の修行の一般的な構成を述べた後に，その一変形を述べたものと考えればよく，特に不自然な点はない．10-11 は，大乗的な思想を説示するものであるが，伝統的な修行法を述べた後に大乗的な要素を付加することも，『坐禅三昧経』等に見られるところであり，特に問題とすべき点はない．

以上のような点から見て，完全に首尾一貫しているとまでは言い難いものの，『略要法』は全体としてほぼ合理的な構成を保っていると言えよう．

これに反して，『五門禅経』の構成は以下のように非常に混乱したものである．(ここでも，『略要法』との対応箇所を右欄に示し，さらに太線で囲む．二重線で囲んだ部分は，特に議論を要する部分である)．

『五門禅経』		『略要法』
1. 導入部（五門禅：安般，不浄，慈悲心，因縁，念仏）	325c11-16	
2. 念仏三昧	325c17-326b18	
3. 不浄門	326b19-c24	
4. 白骨観法	326c25-327a7	298c19-299a2
5. 観仏三昧	327a8-b1	299a3-28
6. 生身観	327b1-9	299a29-b8
7. 法身観	327b9-c1	299b9-c2
8. 観十方諸仏法	327c2-16	299c3-300a10
9. 初習坐禅法（不浄観，四大観）	327c17-329a10	
10. 観仏	329a11-330a20	
11. 慈心観法	330a21-331a7	

12. 続教作慈心観	331a8-332a12	
13. 三病	332a12-21	297c20-29
14. 四無量観法	332a22-b21	298a15-b17
15. 五門禅：不浄，因縁，念仏，安般，四無量心	332b21-c6	298a1-14
16. 不浄観法	332c7-25	298b18-c18
17. 三災及び二十五有に関するメモ	332c26-333a3	

この文献の中には「五門禅」のリストが二回現れ（1, 15）両者の間で五門の順序が大きく異なっている．『五門禅経』は「五門禅」を説くことを標榜するテキストであるから，冒頭に「五門禅」のリストが現れるのは自然であるが，末尾近くなってこのような総論的なことを再説することの意味は理解し難い．さらに，「不浄観」をめぐる議論が，三カ所に別れて現れる（3-4; 9; 16）のは，極めて無秩序であるし，「観仏」をめぐる議論（5-10）の途中に，全く無関係な議論（9）が挿入されているのも不自然である．また，「16. 不浄観法」の終わり近くに「若極其身者，当観白骨」なる一文が現れるが，これは『五門禅経』全体の最後尾に近く，その後に予告された「白骨観」の議論は現れない．一方，『略要法』においても「3. 不浄観法」の最後近くに「若極厭悪其身，当進白骨観」なる一文が現れるが，これはその直後に「4. 白骨観法」の論じられる『略要法』では自然なものである．さらに『五門禅経』では，「3. 不浄門」の後に「4. 白骨観法」が現れるが，ここでの「3. 不浄門」の説示には内容上既に白骨観が含まれており，さらにその後ことさらに「4. 白骨観法」が続くのは不自然である．

さてここで注意すべきことは，これらの混乱は，『略要法』と対応する部分（太枠で囲んだ部分）が，不自然な順序で現れることによってもたらされているところが大きく，この部分を除去することによって，混乱の度合いはかなり小さくなるということである．特に，上述のように，『略要法』の構成上は意味をなす一文が『五門禅経』の構成上は無意味となるような例のあることを考慮するならば，従来言われていたように『五門禅経』から『略要法』が抜き出されたというよりは，むしろ『略要法』が『五門禅経』に不注意に混入された可能性の方が高いように思われるのである．また，『略要法』の数行分（T15：298b1-11）が『五門禅経』の対応箇所（T15:332c17）では欠落している例もあり，この点からも前者が後者から抜き出されたとするのは困難である．

ここでさらに我々の目を引くのが「9. 初習坐禅法」である．このような入門的な記述は文献の冒頭近くにくるのが自然で，このような文献の中心部に，それも前後の観仏に関する議論に挟まれて現れるのはいかにも不自然であると言わざるを得ない．しかしながら，この部分をよく観察すると，『禅秘要法経』の一部と内容・表現上よく対応し，当該部分を要約して挿入しているのではないかと思われるのである．対応関係は以下の通りである．

	『五門禅経』	『禅秘要法経』
不浄観／九相観／慈心観	327c17-29	258c28-259b20
煖	327c29-328a1	259b20-c10
頂	328a1-5	259c10-24
「令骨白浄已分散」	328a6-10	259c25-260a7
「身如草束」	328a10-16	260a8-b14
灌頂	328a16-b23	260b15-261c27
観地大	328b23-c5 (?)[2]	261c28-262a1
観水大	328c6-21	262a2-c6
観火大	328c22-329a7	262c7-25
観風大	329a8-10	262c25-263a11

これら対応箇所を比較すると，内容的に並行するのみならず，多くのキーワードが同じ順序で現れ，両者の類似性が偶然の産物であるとは考え難い．『五門禅経』のこの部分が『禅秘要法経』，もしくはそれと非常に類似した伝承を前提としている可能性は高い．もしそうだとすると，『五門禅経』の当該箇所（「9. 初習坐禅法」）もまた，この文献の本来の構成要素ではないと考えられるのである．

さらにまた，『五門禅経』の「17. 三災及び二十五有に関するメモ」は極めて短い覚え書きで，何らかのノートが誤って書写されたものであると思われ，恐らくは無視しても差し支えないであろう．従って，『五門禅経』のうち，付加された二次的要素ではないと一応認められるのは，以下の諸項目に限られてくるということになる．

1. 導入部（五門禅）	325c11-16
2. 念仏三昧	325c17-326b18
3. 不浄門	326b19-c24

10. 観仏	329a11-330a20
11. 慈心観法	330a21-331a7
12. 続教作慈心観	331a8-332a12

この表とて，なお完全に合理的ではない．この種の文献ではほぼ同義語に近い「2. 念仏」と「10. 観仏」を論ずる節が，「3. 不浄門」に遮られて現れるのは不自然であるし，慈心観に限ってことさらに「続編」のようなものが付加されているのも些か不自然である（つまり，二重線で囲んだ部分には，疑問の余地がある）．さらには最初に提示した五項目のうち，安般ならびに因縁に関する議論は全く現れないのである．しかしながら，現存の漢文資料によって，これ以上合理的な『五門禅経』の姿を復元することは困難であるし，また，二次的と考えられる要素を除去する以前から，この文献には安般および因縁をめぐる議論はもともと含まれていなかったのだということも想起すべきである．

とはいえ，かなり複雑な構成を持つ『五門禅経』を，わずか数節の基本的要素に還元してしまうというのは，いかにも強引な文献操作だという印象を与えるかも知れない．しかしながら，私が想定した形態と類似した伝承が存していたことは，意外な方面から確認できる．それは，モンゴル仏教に伝わる禅経 *Diyan-u γoul udqa kiged, bisil-γalqu-yin jang üile-yi üneger üjügülügvi kemegdekü orusibai*（以下「モンゴル禅経」）である[3]．注目すべきことに，下表に示した通り，この禅経の 3-7 節の部分が『五門禅経』の対応箇所と非常によく一致し，明らかに『五門禅経』に極めて近い何らかの伝承に基づいていたと思われるのである．

モンゴル禅経		『五門禅経』
1. 導入/入門/三種の観想法(貪:不浄，白骨；癡：念仏；瞋：慈)	285.16-288.10	
2. 禅定における身体の整え方（結跏趺坐，etc.）	288.11-289.17	
3. 不浄，白骨	289.18-292.6	3.326b19-c24
4. 念仏	292.7-295.4	2.325c17-326b18
5. 生身	295.5-296.4	6.327a19-b9
6. 法身	296.5-14	7.327b9-18
7. 慈	296.15-298.29	11.330a21-331a7

8. 高度の禅定への導入	299.1-301.2	
9. 初禅	301.3-302.17	
10. 二禅	302.18-303.8	
11. 三禅	303.9-304.6	
12. 四禅	304.7-305.21	
13. 無色定への導入	305.22-306.3	
14. 空無辺処	306.4-307.13	
15. 識無辺処	307.14-29	
16. 無所有処	308.1-18	
17. 非想非非想処	308.18-309.3	

モンゴル禅経の 3, 4, 7 が，丁度上で『五門禅経』の本来の要素だと推定した部分 (3, 2, 11) に対応するのである．モンゴル禅経の 5-6 は『略要法』から『五門禅経』に挿入されたと思われる部分に対応するから，『五門禅経』と『略要法』の混淆はここでも認められる訳であるが，しかしモンゴル禅経は，「5. 生身」の部分の冒頭に，「さらに別の念仏の方法がある (There is still another contemplation of Buddha)」と述べて，5-6 の部分が別系列の伝承に基づいていることを意識していたかのような口吻をもらしている[4]．いずれにせよ，モンゴル禅経は初禅に入るための準備的修行として，不浄観・念仏観・慈観の三門からなる実践法を提示している訳であるが，この禅経の作者が，我々の知る混乱した『五門禅経』の伝承形態の中から，この三門の部分だけを取り出して，上記のような整然とした体系を創り出したとみるのは相当困難であろう．むしろ，不浄・念仏・慈心の三門のみからなる伝承が中心に存在していて，それにさまざまな二次的要素が付加されて現在の『五門禅経』は形成されたのであり，モンゴル伝は，まだあまり増広の進まない『五門禅経』の原形に近い形態を，何らかの伝承経路を通じて知っていたと考えるべきではないだろうか．

『五門禅経要用法』という題名にもかかわらず，本文献の伝承の原点にあったのは，不浄観・念仏観・慈観の三門のみからなる禅経だったのであって，これに他の伝承に由来するさまざまな要素が無秩序に付加された結果が，現存の『五門禅経』だったのではないかと思われるのである．

1) 藤堂恭俊「『坐禪三昧經』に説示する念佛觀の成立背景」『印度學佛教學研究』8/2 (1960). p. 71; 同「鳩摩羅什譯出と言われる禪經典の説示する念佛觀」『福井博士頌壽

記念　東洋思想論集』福井博士頌壽記念論文集刊行會，1960，pp.399-400；月輪賢隆『仏典の批判的研究』百華苑，1971，p.56.

2) この項目に関してはやや問題がある，この部分には「観於地」という表現が二回現れるので，これが地大の観想を意図している可能性は否定できないが，「地大」という表現そのものは現れず，この一節は「観火竟」という表現で結ばれている．この点さらに検討を要する．

3) Aleksei M. Pozdneyev, *Religion and Ritual in Society: Lamaist Buddhism in Late 19th-Century Mongolia*, trans. Alo Raun and Linda Raun (Bloomington: The Mongolia Society, 1978) に収録された英訳を用いる．このモンゴル禅経のタイトルは，Jan Nattier (personal communication) によると「ここなる，修習（Skt. *bhāvanā*）の儀規と禅定の精髄とを正しく教える［テキスト］(Herein is [a text] which correctly teaches the ritual of meditation [*bisil-γalqu*, Skt. *bhāvanā*) and quintessence of *dhyāna*)」を意味するとのことである．

4) 敦煌文献には，『仏説観経』と称して，『略要法』に由来する部分を中心にしつつ，『五門禅経』に固有の部分も少し含んだ写本があり，大正蔵経に収録されている（T85: 1459c-61c［No. 2914]）．『略要法』と『五門禅経』の混淆が相当広範囲に起こっていたことを示唆するであろうが，しかし『仏説観経』の場合でも，『五門禅経』に固有の部分の冒頭に「五門禅要経云」という言葉が現れ，この部分が起源を異にする伝承であることを意識していたかの如き印象を与える．

〈キーワード〉　観仏，念仏，不浄観，慈観

（九州龍谷短期大学教授，Ph. D.）